

研究主題「よりよい人間関係を築く力を育てる学級活動の指導の工夫

—育てたい力を焦点化した指導計画の工夫—

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課

渋谷区立中幡小学校 主任教諭 國 美奈子

第1 研究のねらい

他者への配慮に欠ける言動や、人間関係上の問題を解決していくことが苦手な児童の様子が学校生活の中で問題となる場面が多い。また、体験の不足等から人と関わることによさや喜びを見いだせない児童の姿も見られる。こうした背景を受け、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）では、特別活動の目標に「人間関係」や「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」ことが新たに付け加えられることとなった。これは、児童に人間関係を築く力や集団や社会の中で自他のよさを生かしていく態度を育成していくことが、学校教育に強く求められていることを意味している。集団活動を特質とする特別活動を通して、人間関係を築く力を育てていく教育を確実に実践していくことは今重視されるべき内容である。

一方、特別活動の充実が学校生活の満足度や楽しさと深く関わっているが、資質や能力の育成に十分つながっていない状況が指摘されており、現在、特別活動が抱える大きな課題となっている。その改善を目指して、各活動の目標や内容が学習指導要領に示され、具体的な指導の改善が求められている段階にある。楽しさの根源にあるものに気付かせ、生活の中で発揮される、「よりよい人間関係を築く力」へと高めていくためには、まず教師自身がよりよい人間関係を築くために必要な力について明確に認識し、その視点から児童の気付きや成長を確かに価値付けていく指導を積み重ねていくことが必要であろう。

そこで本研究では、特別活動の基盤となる学級活動の内容「(1)学級や学校の生活づくり」を中心に、児童の自発的・自治的な活動を通して、「よりよい人間関係を築く力」を育てていく指導の工夫の在り方を追究し、実態把握の方法や指導計画モデルを開発することをねらいとした。

第2 研究の内容と方法

1 研究仮説

よりよい人間関係を築くために必要な力やそれらを育てるための活動の要素について明らかにすれば、児童の実態を的確に捉えて育てたい力を焦点化し、それに応じた手だてを取り入れた指導計画を立てることができ、児童に「よりよい人間関係を築く力」を育てることができるであろう。

2 基礎研究

(1) 「よりよい人間関係を築く力」について

小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年8月）や先行研究から、本研究における「よりよい人間関係を築く力」を次のように捉えることとした。よりよい人間関係とは、自他を尊重し、すすんで人と関わり、互いに高め合う人間関係であり、これは児童期のみならず、生涯を通じて求めていきたい姿である。そうしたよりよい人間関係を築くためには、内面的要素と外面に表出される力の両方が必要であると考え、これらを合わせて「よりよい人間関係を築く力」と位置付けた。内面的要素とは、多様な経験から得られる、自分や他者・関わり方への気付きなどの「情緒や認知」、そこから生まれる、人や社会とより関わりたいという「意欲」及び

自他にとってよりよい行動をとろうとする「判断力」であると考えた。そして外面に表出される力として、「自己表現する力」(伝える)、「他者を理解し、受容する力」(受け止める)、「関係を調整する力」(つながる)の3つの力が必要であると考えた。さらに、これら3つの力についてそれぞれ観点(表1)を設け、具体的に捉えていけるようにした。

表1 外面に表出される3つの力の各観点 ※○文字は、「指導計画モデル」(表8)内に反映。

自己表現する力(伝える)	他者を理解し、受容する力(受け止める)	関係を調整する力(つながる)
⑥ 考えや気持ちを伝える	② 考えや気持ちを受け止める	④ ルールやマナーを守る ⑤ 自分の役割を果たす
⑦ 自分らしさを発揮する	③ よさや違いを受け止める	⑥ 援助する ⑦ 協調する・折り合う

(2) 学級集団の現状及び課題の把握について

児童の実態把握及び指導計画立案にあたっては、集団活動の発達的な特質を踏まえた小学校6年間を見通した視点と、学級集団育成上の課題を踏まえた年間を見通した視点の、2つの視点からの考察が重要である。本研究では小学校学習指導要領解説特別活動編(平成20年8月)や先行研究から、前者を低中高学年に分けて整理し(表2)、後者を「Ⅰ段階:居場所があり、安心して活動できる集団」「Ⅱ段階:力を発揮し、協力して活動する集団」「Ⅲ段階:よりよいものを目指し、高め合って活動する集団」と3段階で示す(表3)こととした。これら2つの視点から、学級集団の現状や課題を捉えていく。

表3 学級集団育成のめやす(年間)

表2 集団活動の主な発達的特質

低学年 ・ 教師を中心とする学級集団への所属感や一体感が現われ始める ・ 小集団での協同的な活動ができるようになってくる	低学年 ・ 互いの存在を意識し、特徴を知り合っている ・ 一人一人に役割がある ・ よさや楽しさを感じながら、集団活動ができる	Ⅰ段階 ・ 互いのよさを認め合っている ・ 互いの役割を知り合い、その意義を感じている ・ 目標や目的を共有し、力を合わせてその実現や解決に向けて活動できる	Ⅲ段階 ・ 互いを大切にし、助け合っている ・ 一人一人が活躍でき、互いに感謝している ・ 目標や目的を共有し、よりよいものを目指してアイデアを出しながら、その実現や解決に向けて活動できる
中学年 ・ 小集団による活動が盛んになり、仲間意識が高まってくる ・ リーダー的な児童を中心とした、ある程度の計画的な活動ができるようになる	中学年 ・ 互いの特徴を知り合っている ・ 一人一人に役割がある ・ よさや楽しさを感じながら、ルールやマナーを守って集団活動ができる	Ⅱ段階 ・ 互いのよさを認め合っている ・ 互いの役割を知り合い、その意義を感じている ・ 目標や目的を共有し、協力してその実現や解決に向けて活動できる	Ⅲ段階 ・ 互いの違いも認め、助け合ったり、励まし合ったりしている ・ 一人一人が活躍でき、互いに感謝している ・ 目標や目的を共有し、よりよいものを目指して工夫しながら、その実現や解決に向けて活動できる
高学年 ・ 自分たちで決めた集団の活動目標を大切に、振り返り、改善しながら達成しようとする感情や意識が強くなる ・ 目標を実現するために、互いに信頼し支え合って活動することを求めるようになる ・ 役割や責任を自覚して活動するようになる	高学年 ・ 互いの特徴を知り合っている ・ 一人一人が役割を自覚している ・ よさや意義を感じながら、集団活動ができる	Ⅱ段階 ・ 互いのよさや違いを認め合っている ・ 互いの役割を知り合い、その意義を感じている ・ 目標や目的を共有し、協力してその実現や解決に向けて活動できる	Ⅲ段階 ・ 互いを尊重し、支え合っている ・ 一人一人が活躍でき、互いに感謝し、信頼している ・ 目標や目的を共有し、よりよいものを目指して、工夫したり挑戦したりしながら、その実現や解決に向けて活動できる

3 調査研究

児童・教員を対象に調査(表4)を実施した。調査結果から、児童が課題意識をもっている点や教員の人間関係を築く力に対する問題意識や捉えが明らかになった。これらを「育てたい児童の姿・観察のポイント」の作成に生かした。また、知識と実際の行動には隔たりがあることや、人と関わるよさを児童に感じさせる経験とはどのようなものなのかについて知ることができた。これらの結果を受け、「よりよい人間関係を築く力を育てるための活動の要素」を整理した(表5)。学級会の議題により、関わりの深い要素は異なる。活動の終末等でその要素をより意識化する助言をすることで、「よりよい人間関係を築く力」の育成の一層の充実につなげていくことができると考えた。

表4 調査の概要(平成22年7月実施)

児童対象意識調査 (1)調査対象:都内公立小学校全校児童(435名回答) (2)調査内容と方法: ・ 人間関係を築く力に関する自己評価(4件法) ・ 友達との関わり方で配慮していること(記述式) ・ 対立意見が出た場合の解決方法(記述式) ・ 人と関わるよさを感じた場面について(記述式)
教員対象意識・指導状況調査 (1)調査対象:都内公立小学校5校教員(53名回答) (2)調査内容と方法: ・ 児童の人間関係を築く力の実態に対する問題意識(5件法)(記述式) ・ 人間関係を築く力の捉え方やその育成のための取組について(記述式)

表5 よりよい人間関係を築く力を育てるための活動の要素

- 多様な人と関わる活動
- 自他のよさを実感できる活動
- 人と関わるよさを実感できる活動
- 伝えることに自信や喜びをもつことができる活動
- 他者の思いを深く感じる活動
- 困難や葛藤を乗り越え、自分たちで解決する活動
- 集団における合意形成の過程を学ぶことができる活動

4 開発研究

(1) 実態把握シート

実態把握シートとは、「よりよい人間関係を築く力」の観点ごとに「育てたい児童の姿・観察のポイント」を示した低中高学年別のシートである。シートを活用し、定着度を検討していくことで、学級の実態をより具体的に捉え、育てたい力を焦点化することができる。

表6 「実態把握シート」活用手順

① 「集団活動の主な発達的特質」(表2)を踏まえ、「学級集団育成のめやす(年間)」(表3)から、学級集団の現状や課題について検討し、あてはまる段階を選ぶ
② 「よりよい人間関係を築く力」について、各観点の「育てたい児童の姿・観察のポイント」から学級の実態を検討し、記号でその定着度を記入していく(○…ほぼ全員に定着している、△…一部の児童に定着している、一…全体的に定着していない)
③ 定着が十分でないと判断した項目(△・一)で、その段階の重点項目(★)となっているものを、育てたい力として焦点化し、決定したら、「育てたい力」の欄にチェックする
④ 「指導計画モデル」(表8)を活用し、育てたい力に応じた手だてを選択し、指導計画を立てる
⑤ 集団の実態とは別に、特に気になる児童はいないか検討して把握しておき、個別指導に生かす

表7 「実態把握シート(高学年)」活用例(シートの一部を抜粋)※○数字は、表6の手順に該当する部分を示す。

「よりよい人間関係を築く力」の観点		育てたい児童の姿・観察のポイント	① 学級集団の段階			育てたい力	⑤ 個別指導
			I段階	II段階	III段階		
外面に表出される力	自己表現する力	考えや気持ちを伝える	★	★ ○			○○さん ○○さん
	他者を理解し、受容する力	よさや違いを受け止める		★ △	★	③ レ	○○さん

(2) 指導計画モデル

実態把握シートにより焦点化した「育てたい力」に応じて手だてを選択し、指導計画を立案できるよう指導計画モデルを作成した。これに加え、その議題と関わりの深い「よりよい人間関係を築く力を育てるための活動の要素」をより意識化する助言を終末等に組み込んでいく。

表8 指導計画モデル ※○文字は、「よりよい人間関係を築く力」の各観点(表1参照)を示す。

焦点化した「育てたい力」		自己表現する力	他者を理解し、受容する力	関係を調整する力
指導のポイント		◎ 活動への意欲を高めること ◎ 話し合うことや活動することについて、目的や内容を明確にしておくこと ◎ 一人一人の発言や活動の場を確保すること	◎ 互いの考えや気持ちにふれる場をより増やすこと ◎ 互いを認め合う場を設定すること	◎ 「自分と友達」、「自分と学級」、「自分と学校」などのつながりについて考えさせる場を設定すること ◎ 人と関わるよさやつながる心地よさを意識させること
基本的な活動の流れ		手だて		
事前	① 全員による議題の決定 ② 提案者と計画委員(輪番制)による計画委員会 ・話し合うこと(柱)の決定 ・役割の決定 ③ 活動計画(目的と内容)のお知らせ ・掲示コーナー ・学級会カードの配布	計画委員会の指導 (伝) <ul style="list-style-type: none"> 提案理由を深める 議題名を工夫する 指名の工夫やグループの相談の時間の設定について計画しておく 活動計画の周知 (伝) <ul style="list-style-type: none"> 目的や内容について具体的に共通理解を図る 	計画委員会の指導 (受) (1) <ul style="list-style-type: none"> 事前調査(アンケート等)を通して、多様な考えを引き出す 柱の精選をして、工夫が生まれそうなどころ、対立が予想されるところに論点を焦点化しておく 	計画委員会の指導 <ul style="list-style-type: none"> 時間配分や進め方に関するシミュレーションをしておく、合意形成を目指すようにする(協) 全員が役割を担える工夫を考えておく(役)
	話し合い	【学級会】 <ul style="list-style-type: none"> ① 提案理由の説明 ② 話し合い ③ 決まったことの確認 ④ 振り返り ⑤ 先生のお話(終末の助言) 	意見短冊の活用 (伝) <ul style="list-style-type: none"> 意見の整理ができるようにする ネームカードの活用 (伝) (自) <ul style="list-style-type: none"> 自分の役割や立場を明確にする 振り返りの観点の提示・終末の助言 (伝) (自) <ul style="list-style-type: none"> 発言内容や考え方、話し方、役割分担の様子等に注目させる 発言・活動意欲を賞賛する 	理由短冊の活用 (伝) (1) <ul style="list-style-type: none"> 理由や根拠を明確に捉えられるようにする 振り返りの観点の提示・終末の助言 <ul style="list-style-type: none"> 聞く態度や友達の考えや気持ちを踏まえた言動に着目させる(受) 発言内容や考え方のよさ、努力に着目させる(1) 他者(違い)も認める態度を賞賛する(1)
実践	【集会や制作活動等】 <ul style="list-style-type: none"> ① 実践 ② 振り返り ③ 先生のお話(終末の助言) 	振り返りの観点の提示・終末の助言 (伝) (自) <ul style="list-style-type: none"> 分担した仕事への取組や活動中の様子から自分の考えや自分らしさを生かしていた様子に着目させる 	活動グループの工夫 <ul style="list-style-type: none"> 発表・報告の場の設定(1) より多くの友達と関わる場、互いを話し合う場を設定する 振り返りの観点の提示・終末の助言 (1) <ul style="list-style-type: none"> 相互評価を行う 	振り返りの観点の提示・終末の助言 <ul style="list-style-type: none"> 問題(困難や対立)を解決した場面や要因を意識させる 活動がより充実した要因を意識させる
	事後	振り返りのフィードバック	振り返りの内容の紹介 (伝) (自)	振り返りの内容の紹介 (受) (1)

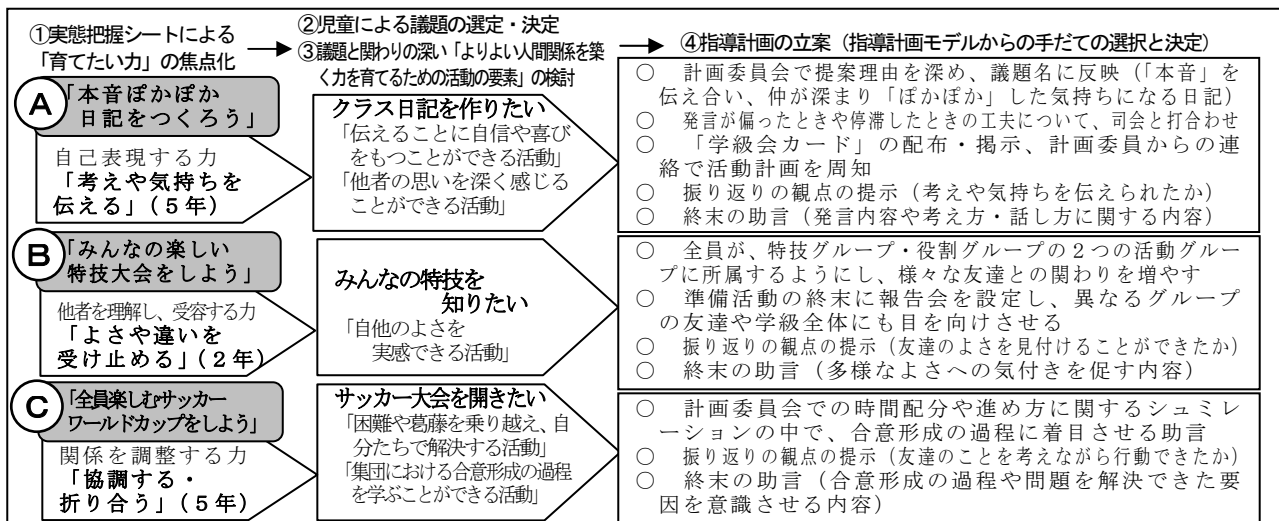
第3 研究の成果

1 実態把握シートについて

シートを活用した教員に対し、学級集団の特徴や個々の児童の課題の再認識、段階的指導の必要性の理解を促すことができた。明確な実態把握と計画的指導に役立つと確認できた。

2 実態把握による育てたい力の焦点化と指導計画モデルの活用について

A・B・Cの3つの議題を通して、検証授業を行った。



Aの授業では、議題名から本質に迫る活発な話し合いへと発展し、82.9%の児童が「自分の考えや思いを伝えることができた」と回答した。Bの授業では、話し合い・準備・集会すべての振り返りを総合すると、活動中に見つけた友達のよさについて91.4%の児童の名前が挙がり、気付きの広がりが見られた。Cの授業後の相互評価では、対立意見を合わせる考え方やパスを回すよう心がけていた様子等への気付きに関する記述が見られた。検証授業前後の調査結果を比べると、焦点化した育てたい力の伸びが見られ(図1)、育てたい力を焦点化し、それに応じた指導を進めていくことは、児童の変容につながると確認できた。育てたい力の焦点化は、助言の視点づくりの機能ももち、学級の成長につながる場面や言動を的確に捉えた児童への有効な働きかけにつながった。

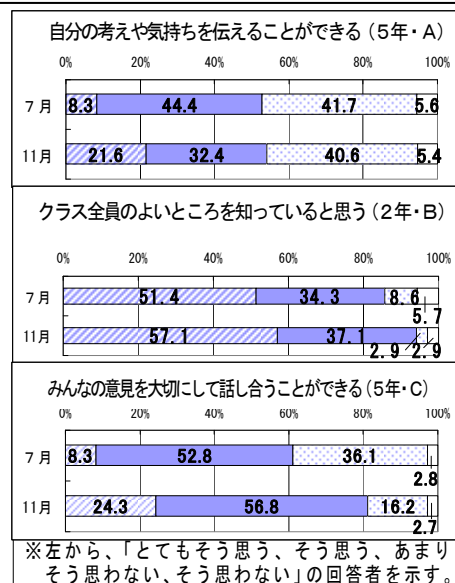


図1 児童の意識調査の比較

3 学級活動内容(2)「ウ 望ましい人間関係の形成」との関連

実態把握シートから特に課題と捉えた力については、内容(1)・(2)の各特質を意識して指導を工夫し、両面からその育成に取り組む必要がある。検証授業では、内容(2)における学習が学級会で生かされていた。関連を図ることで、より育てたい力の定着が促されると確認できた。

第4 今後の課題

活動中には焦点化した力以外にも児童の多くの成長がある。「なすことによって学ぶ」という特別活動の方法原理を大切に、柔軟かつ多面的に気付きや成長を捉えるようにしたい。また、活動内容(議題)の特性を生かすという角度からの指導の工夫も追究していきたい。さらに、妥当性・信頼性のある評価方法や個を伸ばす指導の工夫が今後の課題である。